

成繁は布団の上にあぐらをかいて坐り、ゆっくりと口を開いた。輝子が寄り添って支えていた。「あらためて申すまでもないことだが、この金山城には、城内に大小二つの湧水の池がある。水に困ることはない。薪を採ることも困らぬ。城を守る將の武略に誤りがなく、兵糧矢玉が尽きなければ、数万の軍勢が押し寄せても、容易に攻め落とすことはできぬ。心すべきことは、天嶮を頼み、守城堅固を頼む気のゆるみだ。籠城こそ唯一の戦法と心得てはならぬ」

成繁はひと息いれてつづけた。

「由良、長尾は兄弟、両家のあいだに垣をつくり、心を隔ててはならぬ。たがいに力を合わせて領地を安堵せよ。隣国の国主、列候より招かれたときは、ともに赴いてはならぬ。出陣のときは轡をならべるな。合戦の場においても一つとところにいてはならぬ」

国繁、顕長、長繁の三人は身動きもせず、黙つてしずかに聞いている。

「国繁を顕長も、家族、家臣を疎略にしてはならぬ。野に有為の士があれば取り立てよ。主家に背く逆臣あらば、時を移さず、誅罪せよ。領民の小さな科は咎めるな。恩情をもって処置することを心がけよ。領民が他国で働くことをゆるしてはならぬ。神祇仏閣の修理を怠らず、芳志を施し、その免田を押領することがあつてはならぬ」

館はけむるような小雨に包まれていた。物音ひとつせずしずまり返っている。

「政道は正をもつて基とし、邪を排することである。筋なき弓矢を執るな。ことに当つて決断するときは、家名を守ることがなにより大事と心得よ」

成繁は最後に、

「わしの葬儀は無用、わが亡骸は金龍寺に葬れ」

と遺言して、遺誠のことばを閉じた。

「誓つて父上の戒めを忘れず、わが武門を守ります」

国繁と顕長は誓つた。

「わが武門は新田源氏、由緒ある家名を絶やすようなことがあつてはならぬぞ」

成繁は念を押すように重ねていつた。

「さて、長繁」

と成繁は弟の横瀬長繁を見た。

「わが弟であるのに、支城の一つもあたえなかつたが、金山城になくはならなかつたからだ。よく仕えてくれた。礼をいうぞ。われ亡きあとは、国繁をたすけて働いてくれ。隠居はならぬぞ」

成繁が没したら、それを潮どきに倅の勘九郎に家督をゆずり、隠居しようと思つていたが、隠居はならぬと遺言されては、わしも年を取りました、このへんで隠居をゆるしていただきたいなどことばを返すことはできなかった。

「もとより心得ております」

「頼むぞ」

と成繁はいつて、それから国繁に、あしたの己の下刻、家臣たちを集めるように申しつけると、

疲れきったように寄り添っている輝子にからだをもたせかけた。

国繁、顕長、長繁は退出した。

長繁は屋敷にもどると、机にむかった。墨をすって、巻紙をひろげた。長繁は筆をとって、由良刑部大輔源成繁御遺誠之事と書いた。そして、成繁の遺誠のことばを逐一順を追って書き記した。天正六年六月二十六日、横瀬掃部頭長繁記す、として筆を擱いた。

己の下刻、由良家の家臣が成繁の病床に集まった。横瀬長繁、小俣城主渋川義勝、桐生城代藤生善久、反町城代木村左兵衛、それに大沢下総、久米高次、矢内時英、鳥山浄仙、小金井四郎左衛門、林越中、金谷印幡などである。

成繁は布団の上にあぐらをかいて坐っていた。やはり輝子が寄り添っている。そばに国繁がいた。家臣たちは成繁に促がされて、成繁の病床を囲んで坐った。一様に沈痛な顔をしている。

「わしは、もはや余命いくばくもない」

と成繁は家臣たちを見まわしていった。

「わしは、よい家臣にめぐまれて、しあわせであった。由良家がきょうあるのも、そのほうたち家臣が、命を惜しまず、働いてくれたおかげである。あらためて礼をいう」

鳥山浄仙のひげづらに涙が流れている。林越中がこらえきれずに嗚咽した。

「わしが亡きあとも、たがいに力を合わせ、国繁に忠勤を励んでくれ」

「われら家臣一同、殿の手足となり、由良家安堵のために、身命をなげうって働くことにいささかも変わりございませぬ」

小侯城主渋川義勝が家臣一同を代表して誓った。

「頼むぞ」

と成繁はふたたび家臣たちを見まわした。

家臣たちは成繁を慕って、

「お館さま、お館さま」

と口ぐちに声を出した。

成繁はいちいちうなずいていた。

家臣たちはしずかに退出した。

成繁は横になった。薄く眼をつぶっていたが、やがて眼をひらいて輝子を見た。

「わしが死んだあとも、金山城を離れるな。国繁の正念場はこれからだ。分別を誤らぬようにしてくれ」

「金山城を離れるつもりはありません。大事なことには、口をさしはさむつもりでおります」

「それでよい」

と、成繁は眼を天井にむけたが、なにか思いついたらしく、すぐにその眼を輝子にもどし

た。

「貞繁のことだが」

貞繁というのは国繁の嫡子である。国繁の妻は常陸国結城城主結城晴朝の家臣皆川康照の娘だが、晴朝の養女になって由良家に輿入れしてきた。金山城ではお藤の方と呼ばれている。長男は早世し、つぎが女で、貞繁は三人目の子である。まだ五歳で、お藤の方が手もとにおいてかわいがっている。「貞繁をいつまでもお藤の手もとにおいて甘やかしてはならぬ。お藤の手から引き離して、丈夫な、強い武将に育てねばならぬ。由良家将来のためだ」

「心得ております」

と輝子はいった。

由良成繁はそれから二日後の天正六年六月二十九日に死んだ。雷鳴がとどろき、はげしい雨が降っていた。成繁は襲ってきた死とたたかうように、おそろしい形相で布団の上に立ちあがった。なにかを掴み取ろうとでもするかのように両手を前に突き出した。ひらいた指が激しく痙攣していた。足をわずかに踏み出したが、まるで雷に打たれたようにどたつと倒れて、そのまま絶命した。

成繁の遺体は本丸の空地に木の柵でかこいをつくり、そのなかに薪を積んで焼いた。本丸で茶毘にふすことを輝子が望んだのであった。風はほとんどなく、成繁を焼く煙は雨模様の曇り空にまっ

すぐ立ち登っていった。

一族、家臣の順で、成繁の骨を竹の箸で拾って、壺におさめた。錦織の厚地の布で骨壺を包み、檜の箱にいれて、白絹の布でおおった。成繁の骨壺は輿に乗って金山城をおりた。遺言どおり、金龍寺に埋葬された。

初七日の法要は金龍寺でいとなまれた。法要がすんだあと、輝子は金龍寺の本堂で髪を落とした。大拙和尚は妙印尼という法名を輝子に贈った。

「よい法名をいただきました」

輝子は礼をいった。

「ながいあいだ、亡きお館さまを支えて、ご苦労なさいましたが、これからはご領内に庵を結んで、心しずかにお暮らしになるのがよいでしょう」

と和尚はいった。

「いずれそういう日がくることを願っていますが、いつになったら念仏三昧のしずかな暮らしができるか、しばらく先のことになるでしょう」

「やはり、お城から離れることはできませんか」

「この乱世では、城内の館が庵のようなものです」

輝子がいうと、和尚は、

「しばらくお待ちください」